

# これまでの活動 2008(平成20)年

「井上さちこ」の今までの日々の活動をつづった日記です！

## 2008(平成20)年10月21日 おおのハートバスは弱者救済の福祉バスとしてスタートした

おおのハートバスのルート・ダイヤ改正に対する意見募集(2008年10月3日)があり、廿日市市のHPで以下のようなコメントが載っていた。

●おおのハートバスのルート・ダイヤ改正を進めています。

大野地域の利用者や地域の代表、バス事業者などを構成員とした「大野地域交通協議会」で検討中ですが、HPでも平日ルート、平日ダイヤ、休日ルートの改正案を提示して、ご意見を伺う機会を設けました。休日ダイヤは大幅な改正ではないため案の提示をしていません。これらの提示案は、大野地域交通協議会の中でもいくつか修正意見が出ており、検討中です。改正時期は3~4月を予定しています。

私は本日、次のような意見をメールで送った。

大野地域のバスは弱者救済の福祉バスとしてスタートしています。弱者救済が主目的ですから、収益性について考慮はするけれども、それより優先する考え方は、車を運転できない方が通院に利用することや、生涯学習、市民同士の助け合いを推進する活動のために、いかに利便性が図られているかが大きなチェックポイントになります。ルートの改正や、時刻改正においても、その点を充分認識しつつ検討して行くことが重要です。何のために福祉バスはあるのかという、目的や理念を不断の注意で点検しておかなくてはなりません。

本来、使用者の方々が中心となってルートや時刻の検討委員会で決定すべきであり、交通弱者のための施策ですから、収益性重視のためために民間バス路線が撤退していった地域を重点的に対象とするのが「大野地域のハートバス」であり、その理念の下に発足しました。

どんな人が多く利用しているのかをきちんと把握して、「大野のハートバス」のルートや時刻を決めていくべきです。その点、市は今年度アンケート調査をされましたが、調査や結果報告を一番意見聴取しやすく利用者も多いと推定される老人クラブや母子寡婦会や女性会などに聞いておられません。このあたりも、意見聴取方法に問題があると思われまして、このたびのアンケートについても、ご存知かどうか2,3人の老人クラブの皆さんにお聞きしましたが、ご存知ありませんでした。住民ニーズを把握する場合、利用者にお聞きするというのが鉄則です。この点について組織のご協力を得て、幅広く意見聴取されなかったことは問題だと指摘しておきます。しかし、随時見直しをするという姿勢は評価したいところです。ぜひ、見直しの時点では、直接多くの利用者にお聞きするということを基本に取り入れてください。

.....

おおのハートバスのルート・ダイヤ改正については、大野地域の利用者や地域の代表、バス事業者などを構成員とした「大野地域交通協議会」で検討をしているとのことだが、並行して利用者の声を直接聞いて欲しいと意見を出した。また先般大野商工会が大野地域選出の議員を呼んで、懇談会を開いたが、2人の議員は、おおのハートバスの収益性が悪いので、収益性についてアップするような対処が必要だと発言していた。この点について、真っ向から反対意見を付しておきたい。

## 2008(平成20)年9月17日 わたしなりの平和活動~守屋ミサさん

本日9月17日、私が所属している「大野歴史ガイドボランティア」の会が、大野陸軍病院(広島県廿日市市宮浜温泉・当時広島県佐伯郡大野村)で当時婦長をされていた守屋ミサさんの講演会を開催しました。

日本赤十字社が建設し陸軍病院として使っていた大野陸軍病院が、63年前(1945年)の今日、8月6日の原爆被害のため療養中だった被爆者の方と、被爆の実相を研究にきていた京都大学の教授たちが枕崎台風に遭い、土石流に襲われて命を落としました。原爆でやっと助かった人がまたここで惨禍に遭い、命を落とされたことは言葉では表現できないものですね。

守屋ミサさんは、2008(平成20)年現在、87歳になられた。1945(昭和20)年当時、25歳で婦長でしたが、話を聴いて、若いのに判断・判断の連続だった働き振りでした。守屋さんは、気象情報が軍に握られていて国民生活に生かされていなかったことから、無防備のまま大きな台風襲われたことを指摘されました。

現印象的だったのは、ご自分の出身母体の日赤に問い合わせても、1945年9月17日の枕崎台風で大野陸軍病院が土石流で大惨事に遭ったことなど知る職員がいないこと、日赤誌史には3名の方が大野陸軍病院の土石流で行方不明となっていると書かれていたが、1人は自分が看取ったので、遺体は見つかった、と修正するべきだと申し入れたら、あなたのおかげで面倒だと職員に言われ、一人一人のなくなったことへの対する態度はいかがなものかとおっしゃっていました。隣組などの組織で人々の気持ちを縛って、軍は国民が知らないうちに戦争を進めてきたが、今の状況も似ている。

現在住んでいるマンションでの話だが、日赤社資募金は一律一軒300円とか500円とかと決められて回覧されている。こういう部分は隣組制度の名残りであり、私は反対している。だから、町内の代表者の方に申し入れて、マンションの共有スペースのところに募金箱を置いて、各自の判断に任せて募金していただきましょう! と提案したらそれが通った。また日赤にも手紙を書いて、募金とはそもそも各自の判断や気持ちにまかせるものと伝えた。そして500円を募金するとき「ただ寄付するだけか、社員になりたいか」を記載する欄があるので、私は社員になるに○をしている。そうすれば、社長になる権利も持てるし、議決権も持てる可能性も出てくるわけだから。

国民が知らないところで物事を進めて行くことが一番いけないこと。私はいま、私ができる平和活動として、花の種(平和の種)をひろめることと、オカリナにた笛(平和の笛)を普及させることをやっている。動きにくくなった私なりの平和活動です、と結ばれました。歴史ガイドのみなさんも、平和を守るために事実を伝えるというところを伝えることが大事です、と言われました。

私なりの平和活動。こうやって考えると、行動しやすいなあと思えました。今日NHKの番組でジュリーの「我が窮状」を聞き、ジュリーの平和活動にも心を打たれました。「窮状」を「9条」と読み替えてくださればいいと思います。

「この窮状 救えるのは静かに通る言葉」…いい言葉ですね。曲も美しい曲でした。詩を載せておきます。

「我が窮状」 作詞:沢田 研二 作曲:大野 克夫

麗しの国 日本に生まれ 誇りも感じているが

忌まわしい時代に 遡るのは 賢明じゃない

英霊の涙に変えて 授かった宝だ

この窮状 救うために 声なき声よ集え

我が窮状 守りきれたら 残す未来輝くよ

麗しの国 日本の核が 歯車を狂わせたんだ

老いたるは無力を気骨に変えて 礎石となろうぜ

諦めは取り返せない 過ちを招くだけ

この窮状 救いたいよ 声に集め歌おう

我が窮状 守れないなら 真の平和ありえない

この窮状 救えるのは静かに通る言葉

我が窮状 守りきりたい 許し合い 信じよう

## 2008(平成20)年9月12日 観光大使の鹿が宮島からいなくなった

9月9日、10日と2日続けて宮島に渡った。しかし宮島棧橋に降り立ってみて驚いた。鹿が一頭もいない。海岸通を歩くが、やはり一頭もいない。大鳥居をバックに写真屋さんが営業しているところ…ここには若い鹿が3頭。いつものように観光客と写真に写っている。しかし大願寺の境内付近、公衆トイレや川端、いつもならたむろしている鹿たちは一頭も見かけない。僅か大聖院付近に一頭を確認できた。

翌日は目的地に着くまでに5頭、帰りは午後8時ごろになったのだが、海岸通に8頭が寄り合っていて休んでいた。観光大使である鹿がいなくなり、違和感がある。

以下は、廿日市市のHPから…。

「宮島地域における鹿対策の経緯」

昔から宮島地域に生息する鹿は、野生動物ではありますが、保護条例などの制定により住民に大切に扱われてきた歴史があり、住民とともに暮らしてきました。しかし、近年給餌などによる人為的関与により、市街地に定着する鹿が増加し、観光客のみならず、住民の日常生活にも大きな影響を与えるような様々な問題が生じるようになりました。そこで、1998(平成10)年5月に旧宮島町は『宮島町鹿対策協議会』を発足させ、より良い解決策を協議してきましたが、問題の解決には至りませんでした。

廿日市市に合併後、2007(平成19)年11月には広島県により島内全域を対象にしたニホンジカの生息状況等の調査が実施されるとともに、市により住民の鹿に対する意識調査を実施し、鹿による各種問題の解決に向けた協議を行うため、学識経験者、地元関係者等を委員とし、国・県のアドバイザーにより編成した廿日市市宮島地域シカ対策協議会を立ち上げました。2008(平成20)年3月に第1回の協議会を、同年6月には第2回の協議会を開催しました。

今後は、この協議会において、宮島におけるニホンジカの生息状況等調査検討報告書の最終結果及び被害状況や住民の意識変化の分析を基に、『人間と鹿の共存』を目指して、宮島地域シカ保護管理対策のガイドラインを作成してまいります。2008年3月の鹿対策協議会の議事録では今後5年間で、市街地の鹿を半減させていくと合意したと掲載されている。てっきりこの合意を今年9月に前倒しで実施したのかと勘違いするくらいの減りようだ。山に逃げているのかどうかはわからないが、宮島にご縁があって35年。初めて目にする「観光大使の鹿が宮島からいなくなった」風景である。

## 2008(平成20)年8月11日 有権者の責任

2008年8月3日10時48分配信の記事によると「燃料無策」と自民支持する団体への献金中止(奈良)、と出ていた。高騰する燃料費問題に業を煮やした奈良県トラック協会郡山支部(中秀支支部長、54社)が自民党を支持する関連政治団体への政治献金を中止することを決めた。政府・与党が燃料費高騰問題に無策というのが理由。「倒産する会社もあるのに何もしてくれない」と、選挙応援の取りやめも決め、民主党など他党の応援を検討している。中支部長らによると、6月上旬の支部会で会員が献金廃止を提案し、全会一致で決まった。同協会(12支部、約500社)加盟社の約7割にあたる約370社が「県トラック運送事業政治連盟」にも加盟。同連盟は1社あたり年額5千円を徴収し、自民党支部などに献金している。…以上のような記事を見て思ったのは、議員を出した有権者の責任とはどういうものかということだ。業界ぐるみでその業界のみが対象の利益誘導については、反対だ。しかしここで取り上げたいのは、有権者の責任だ。投票した党や政治家について、有権者は絶えず公約に反していないか、政治家自身への利益誘導にばかり走っていないか、政治報告をしているかなど、次の選挙のための判断材料について関心を持津古とが必要だ。そしてその意に反した場合は、次には投票しないという行動こそが、政治を変える一助になるのではないか。

## 2008(平成20)年8月11日 減災の工夫の見直しは待たなしで

今年は、積乱雲をよく見る年だ。産経新聞によると、7月28日4人が死亡した神戸・都賀川は源流から河口までの距離が短く水位変動が激しい川だが、事故の起きた7月28日は10分間で水位が1.3メートル上昇していたという。全国的にも局地的大雨の発生件数は増加傾向にあり、ここ数年は都市部でこうした水害による被害の発生が目立っている。気象庁によると、1時間降水量が50ミリ以上の降雨件数は全国的に増加傾向にある。観測地点1000地点あたりの発生回数は、昭和51年～62年は年平均162回だったのに対し、昭和63年～平成9年は177回、平成10年～平成19年は238回と平均値が増えている。つまり、危険予知の学習も気候の変動が激しく変化している現状を踏まえたものを取り入れる必要があるということだろう。山間部で大雨が降ったら直ちに、下流の川遊びは中止する、このような危険予知の情報は地域地域で取り組まなければならないと思う。その後東京都の下水道工事のマンホール内で激流に飲み込まれて作業していた方が亡くなった事故も起きた。こういう工事の場合、警報が出た時点で作業を中止するという事になっている。この災害を防ぐには、やはり雷注意報や、大雨注意報が上流地域で出たと同時に、対処することが必要だ。1時間降水量が50ミリ以上の降雨件数は全国的に増加傾向にあり、30年前に比べると4割以上増えているというデータを踏まえて、減災の工夫の見直しは待たなしで取り組まなければならない時期に来ている。

## 2008(平成20)年7月24日 同時代に生きる人とひそかに位置づける人がいる人生

7月24日、河野美代子さんの出版記念会に参加した。20数年前「さらば悲しみの性」を出版しました。そのころわたしは若かったと河野さんがスピーチすると、同じ時代を生きてきた人たちからどっと笑いが起こった。大学時代は勇ましいあだながついていたそう。学生運動花盛りのときだそうで、わたしは中学生だった。新聞をよく読むほうだったが“どうだいふんそー”という言葉は知ってはいたが、広大もそうだったとは知らなかった。なんといってもビートルズっていういいなおもった年にビートルズが解散した。アレは中学校2年だった。河野さんの名前を知ったのは、宮島町役場時代「さらば悲しみの性」を出版されて、青少年の性教育という分野で、講演にひっぱりだこだったころのことだ。何ヶ月先も講演依頼が入っておられて、なかなか日程が合わないと保健師さんが困っていたのを覚えている。今回の出版は、性教育バッシングという風潮の中、果敢に裁判で戦った河野美代子さんの裁判記録というべきものである。「わたしは泣き寝入りはしない」だから昨年夏の参議院選挙のときだったが、選挙も裁判も闘ったと説明された。すごい! 選挙と裁判・誰でもが経験するものではないふたつのことを同時進行でやっておられたわけだ。国政にでたかった、そして憲法改正の流れを止めたかったといまでもその点だけはここにひきずっているとも。ぶれない強さが、20数年「さらば悲しみの性」を出版したころわたしは若かったと河野さんがスピーチするとどっと笑ったひとたちの共感をよぶのだろう。同時代に生きる人とひそかに位置づける人がいる人生は、彩りがあるように思う。

## 2008(平成20)年7月24日 ちいさいひとからはがきをもらった

7月24日、「文化としての手紙を残すこと」を目的とした事業の参加者の、ちいさい人からはがきをもらった。嬉しい。「この前はわなげで2位になりました。つぎは1位になりたいです。こんどもわなげをしてください。さようなら」たった3行の文章。小学校2年生からののがきだ。輪投げで2位になって誇らしかった気持ち、次は1位になりたいと思う強い気持ち。だから次もゲームには輪投げを入れて欲しいと、期待をこめて願う気持ち。「日本一短い手紙」という企画を福井県丸岡町がおこなっているが、毎年多数の応募がある。短いからこそ気持ちがぎゅっと詰まっているのだろう。わたしも、ちいさいひとからもらったたった4行のがきをもらって感動した。手紙はやはり、もらうと嬉しい。

## 2008(平成20)年7月23日 手紙を書くことは文化

一昨日「文化としての手紙を残すこと」を目的とした事業を行った。小学生の2年生から5年生までの低学年のこどもたちが参加してくれた。手紙の文化は平安時代中期の源氏物語にもやりとりが頻繁にあらわされているが、その後日本に1000年以上も継承されてきた「文化」である。その文化がこの10年、つまり西暦2000年になったころから急に、携帯電話のメールに取って代わられた感がある。

先日団塊の世代の人と話していたら、テレビがスタートの昭和30年代、学校の先生が小学生だった彼に「テレビとラジオと新聞の3つのうち、何が最初になくなっていくか?」と質問したそう。幼かった彼はラジオかなと思ったそうだが、妙にこの質問を鮮明に覚えているそう。ひとつの文明が栄え、終末をむかえる時代の変遷期に今「手紙を書く」という行為があげられるのではないかと、そんな気がする。

ほかに時代の変遷期の中にいるものはと考えると、敢えて列記する。「日舞」「新聞」「演歌」「着物」「茶道」「華道」。これらの文化を残そうという活動も強い意志で起こってくるだろうし、おいそれとはなくなりたくないが確実に「大衆的」でなくなっていくことは明白ではないかと、と連想ゲームのように考えた。

「手紙を書く」この事業に、ちいさい人たちが参加してくれたことで、いつか青年になったとき何割かが手紙の文化を残してくれるだろう…と思うのだ。

## 2008(平成20)年7月20日 廿日市市のHPに「緑資源幹線事業」の記事が復活した

7月19日(土)に廿日市市のHPをチェックしていると「緑資源幹線事業」の記事が復活した。

7月12日に「廿日市市のHPから『緑資源幹線事業』が消えた。なんとふしぎなことがあるものだ。『緑資源幹線林道事業』という項目はあるのだが、クリックすると“ファイルが見つかりません”と出る。いつの間にか削除している。こういうことをしているのだろうか。クリックしなければ、載せていると市民は思ってしまう」と書いたが、7日目には復活している。おかしいことがあるものだ。

さて、ちょうどいいから、細見谷溪畔林幹線道路のことを書きたい。

この事業当初「大規模林道」と言う名称を使っていた。昨年、真野助役(現在真野市長)は、大規模林道ではなく小規模な林道だと言っていた。内容が変わっていないのに名称を変更して、どういう意味があったのだろうか。

## 2008(平成20)年7月17日 ウェルカム・副市長! 何かあったらゆうてください!!

7月17日、広島市に初の女性副市長が誕生したのを祝ってウェルカム・パーティを開催した。

豊田麻子(とよだあさこ)副市長、42歳。広島市では初の副市長である。豊田氏は、情報技術分野の担当として新たに設けるCIO(最高情報責任者)も兼任する。重ねて、男女共同参画社会、平和など5つの分野も担当するということである。

パートナーを東京に残しての単身赴任。引越しの作業もパートナーがほとんどやってくれたそうで、スピーチを聞きながら、本当に副市長の誕生を心から嬉しく思った。思えば1999年12月、わたしたち女性は、男女共同参画社会基本法を持つにいたった。それは、戦後から多くの先輩たちが営々と男女平等の活動を続けてこられた結果の、努力の賜物であると思っている。

その2年後に広島県、広島市において男女共同参画条例の制定に、女性たちが力を結集して、わたしたちの地域に、男女がともに生き生きと暮らせる社会作りを目指そうという「根拠」を持つにいたった。その後紆余曲折の時を経て、この度若くて意欲みなぎるリーダーを迎えることができ、心からウェルカム豊田さんとお伝えしたい。

豊田副市長、今日はせまじた女性たちのうしろには、まだまだたくさんの女性たちがいます。

最後に渡辺さんが言いました。

「副市長、よろしく願います。そして、何かあったらゆうてください!!」

わたしたち、うしろでしっかり応援しています!